

オンライン版創刊号巻頭言

城生佰太郎

1

筑波大学 一般・応用言語学研究室の『言語学論叢』が、このたび電子化されるといふ。思えば、1982年4月に第1号が創刊されて以来、実に26年の長きにわたって一般言語学と応用言語学の発展に寄与貢献してきたことになり、誠に喜ばしい限りである。

この間、1985年の5月(第4号)には林四郎教授退官記念号、1990年6月には寺村秀夫先生追悼号(第9号)、1993年9月には松本克己教授退官記念論文集などの特別号が編まれたほか、2001年12月には20周年記念号(第20号)が出され、「第20号に寄せて(Preface)」:高田 誠、「一般言語学研究室および音声実験室の歩み」:城生佰太郎、「応用言語学研究室の歩み」:草薙裕の諸氏と、卒業生を代表して『言語学論叢』創刊の頃」:橋本邦彦、「あの頃みんな若かった」:吉村弓子、「思いでいっぱい」:川崎晶子、「SEM語学の筑波学派——言語学論叢に見る古代オリエント言語研究の半世紀」:池田 潤の諸氏の文が載せられた。

2

そもそも、筑波大学がつくられたころは、応用言語学などという呼称そのものがめずらしく、それだけでも本学の「売り」であったと記憶する。開学当時の応用言語学は、担当教官の専門性との兼ね合いから、英語教育、日本語教育に加えて心理言語学、コンピュータ言語学、日本語文章論などが置かれていた。いっぽう、一般言語学は東京教育大学時代からの伝統を引き継いだ形で、オリエント言語学とアルタイ言語学、それに実験音声学が開講されていた。このため、いわゆる言語学系の雑誌としては教育あり、心理あり、音声あり、そしてそれ以外にマイナーな特殊言語あり…といったありさまで、はなはだにぎやかな内容が毎号のように誌面を彩ってきた。これは、若干ひいき目で見ているかもしれないけれど、他大学にはみられない豊かさであったと思っている。

3

その後、時代は流れ、周知のごとく応用言語学は社会的に認知されるようになり、いまやその呼称だけで人目を引くなどということはなくなった。これに加えて、少子化問題も絡んで入学者の言語学離れが加速化しており、マーケットとしての言語学は、決して安泰ではない状況に追い込まれつつある。たとえば、かつては大盛況

を誇っていた日本語教育も、ピーク時からみれば志願者数の減少は否めず、英語教育でさえもその兆しは否定できない。さらに昨今の構造的不況は、今後のあらゆる研究分野に悪影響を及ぼすことは、火を見るよりも明らかなことであろう。

したがって、このような四周を取り巻く厳しい状況下にあつて、本誌をあえてこの時期電子化に踏み切った勇断には諸手をあげて賛同の意を表したい。その理由は、まず第一に短時間でより多くの人たちに研究成果を公表することができること、次にお金がかからないこと、そして第三に編集作業ならびに発送などの手間隙が節約できること、などの点に大いなるメリットを認めるからにはほかならない。

4

あえて繰り返すが、先にも述べたように、言語学系にとっての現況は決して明るいものではない。だからこそ、いま私たちが真っ先に取り組まなければならない問題は一篇でも多くの言語学的研究成果を世に問い、その魅力をとおして、一人でも多くの研究者予備軍を増殖させることである。要するに、仲間を増やすこと。これ以上に有効な打開策はない。だからこそ、即時性のある電子メディアを用いて経済的に論文を発表することができるこのオンライン版『言語学論叢』をフルに活用して、院生全員が一丸となって質のよい論文を発表すべく奮励努力して行かなければならないのだ。

また、一般言語学と応用言語学がそれぞれ固有の雑誌を持っているのだから、両者が無理に顔つき合わせて「一般・応用言語学、」一名「一応言語学」などという情けない名前をつけるくらいならば、いっそのこと解散してしまったほうがスッキリするなどというとんでもない考えを持っている人がいるとしたら、「ちょっと待った!!!」と言っておきたい。若い学徒にとっては、研究発表の場というものは多に越したことはないからである。いきなりレフェリーつきの学会誌に発表するというよりも、まずは本誌のような内輪の雑誌に発表しておくということは、医療における「予防注射」のようなもので、きわめて精神的には安全効果が絶大なのである。

ついでのことには、せつかく雑誌に投稿するのだから、査読制度を充実させて少しでも質的向上に努めることも期待しておきたい。できれば、現役の教員が専門性に応じて対応するのが望ましいところだが、最近の研究環境がかなり悪化してきており教員の研究時間を圧迫していることを考えると、ここは名誉教授など一線を退いた人材の登用などが検討されても良いのではないかと思われる。

さらに、一般・応用それぞれのコースで行われている大学院の月例研究会における口頭発表も、「研究ノート」扱いにして成文化するよう努めることを提案したい。とにもかくにも学者というものは、「書いて喋って何ぼのもの」である。だからこそ、1回でも書く機会を多くすること。自分自身を、原稿締め切りという縛りによって鼓舞すること。そうして、もちろん期限内に文書化できるよう訓練することである。プロになっても、ズルズルと締め切り期限が守れない研究者がいて、ほかの人たち

に迷惑をかけるケースが少なくないだけに、こうした学者における基本的マナーを習得することも、本誌のになっている大きな使命のひとつとなるだろう。

5

以上、編集部からの要望にお応えして、本誌の性格、歴史、そしてオンライン版の出版に際しての意義、今後へのメッセージなどについて思うところを述べた。関係諸氏の、今後におけるますますの活躍を祈念して筆者の責をふさぎたい。

(城生佰太郎 一般言語学領域)